

## 「通勤天国」

(2003)

会社生活40年間の殆んどが宇部本社・東京本社勤務だった、2年間のトルコ滞在、或いは東京・宇部に家族を呼ぶ迄の間の独身寮滞在を除き殆んどが自宅からの通勤であった。

宇部勤務時代は実家が隣町にあり、通おうと思えば車で30分、世のサラリーマンから見れば理想的な距離かもしれないが、車嫌いもあり、何よりも自宅建築の夢が余りにも大きく、宇部の地に家を建ててしまつた。会社から僅か2km・・・世のサラリーマンには夢のような距離だ、車で通勤するにもエンジンを掛けて坂を転がり降りれば5分で会社に行き着ける、健康の事もあり天気のいい日は毎日弁当袋を下げて徒歩通勤していた、30分だった。

さて1988年、東京品川の天王洲で当社の東京本社ビルの建設、といふ事で東京勤務になり、暫く自分の足で、マンション探しを始めた。狙いは東海道線、又は京急線。川崎辺りから探し始めたが段々と都心に近づき始め、いつの間にか多摩川の内側に入り、梅屋敷—鮫洲—青物横丁と近づき、終には東品川に手頃なマンションを見つけた。何と天王洲の地で大学通りの長女・長男も何とか育て上げた。東京本社勤務の社員は約千人いたが通勤費の出ない（3km未満）のは、僕と社長の二人だけだった、社長は本社と同じ敷地内に建てたマンションに入つてもらつ

ていた。

冬晴れの機上鋭き富士の見ゆ  
寒雲の翼震わす伊豆上空  
観覧車初日と共に空に出る

薔薇を見て 深大寺蕎麦又旨し  
花見船土手行く人の賑やかし  
目黒川冷えて遠富士見晴るかす

満ちてくる犬吠崎の冬の海  
春風の生まる丘あり城ヶ島  
九十九里どこまで行けど鰯雲  
冬怒涛小さく見ゆる九十九里  
雨煙る裕次郎灯台春の暮

晩夏光ビルのガラスは空に溶け  
どんどん焚く目出度き善男善女かな  
奇声する夜のマンション汗返る